

手を入れれば森は生き返る



国土の7割が森で覆われる森林大国・日本。

温暖な気候や豊富な降水量によって国土は緑に彩られています。

しかし、主に戦後に植林された森林の4割を占める人工林の

多くは、木材価格の低迷や林業担い手の減少により、  
荒れ果てた森に変わろうとしています。

このままでは貴重な資源である森林も危ないのです。

農林中央金庫は、「公益信託 農林中金80周年森林再生基金(FRONT80)」

を立ち上げ、日本の健康な森の再生に努めています。



# 森林再生基金(FRONT80)が 目指すもの

京

都議定書で日本が掲げる温室効果ガス削減目標6.0%(1990年比)。この3分の2にあたる3.8%が実は「森林によるCO<sub>2</sub>吸収量」によって賄われるという話は意外と知られていません。

森林は植林されて20〜30年頃が最もCO<sub>2</sub>を吸収し、炭素を固定します。わが国では、新たに造成される森林(新規の植林、再植林)に限られていることから、京都議定書が定める温室効果ガス削減でわが国が成果をあげるには、間伐などの森林整備が最も有効だとされています。

しかし、日本の林業地の多くは、林業家の高齢化が進行しているうえに後継者が育っておらず、森林所有者の多くが不在村者となって、手入れの行き届かない山が各地に広がっています。こうした状況を背景に、当金庫は、創立80周年を機に、平

成17年に国内の荒廃した民有林を再生し、森林の公益性を発揮させる事業・活動に対して助成を行う「公益信託 農林中金80周年森林再生基金」を設立しました。日本の森林危機克服のための「最前線」という意味から「FRONT80」とも呼んでいます。

## 森林再生基金 (FRONT80)

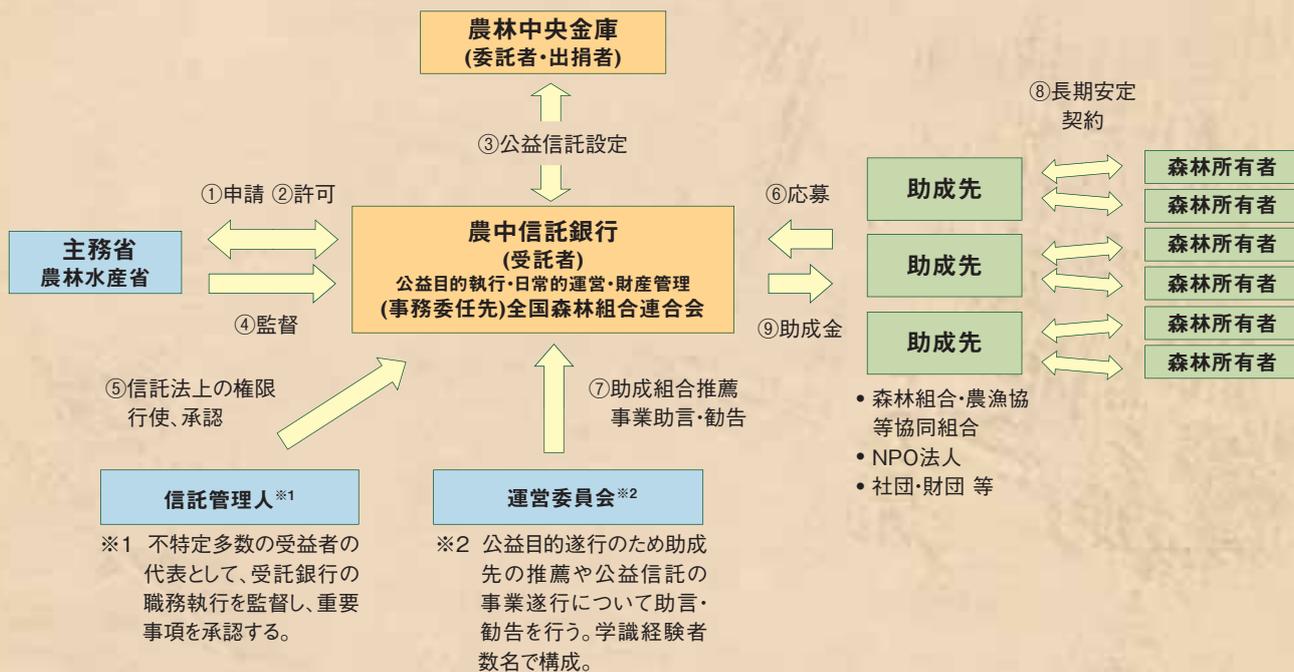
### 助成対象事業

国内の荒廃した民有林の公益性を発揮させることを目指した活動であって、地域の森林に対する長期ビジョンを持った活動で、かつ費用対効果に十分配慮した創造性が高いと認められる事業に対して助成金が支給されます。

### 助成金額

- ①助成金額は年額1億円を予定
- ②1件あたりの助成金の限度額は3,000万円

## 農林中金80周年森林再生基金 (FRONT80) スキーム図



当基金は特定公益信託(信託財産10億円、期間10年程度、1年あたり1億円程度を助成)の仕組みを活用しています。

森林再生基金 (FRONT80)  
助成先のご紹介

ケーススタディー

飯伊森林組合 (長野県) の里山の森林再生事業

助成事業の概要 (第3回助成)

マツクイムシにより壊滅的な被害を受けた  
高森町の里山アカマツ林の森林再生事業



マツクイムシの被害により荒廃したアカマツ林



飯伊森林組合の概要 (平成21年4月1日現在)

組合員数	10,682名
組合員所有面積	82,202ha
管内市町村数	1市3町9村
役員員数	理事23名、監事5名 職員57名、常雇人12名、 作業班員125名
平成20年度の総事業費	約20億円



こういった状況は、飯伊地域に限ったことではない。特に小規模森林所有者は、自分の所有林の境目さえ分からなくなっていることも多いそうじゃ。

**当** 組合では、平成17年度から組合員に代わって森林の現状把握から施策の計画・提案等を行う「森林管理委託事業」を進めてきました。所有林地20ha

小規模森林所有者の意識改革へ

また、当組合が行ったアンケートでは、組合員の後継者が所有林から離れた地域に在住している例も多く、不在地主化が進めば、里山を含めた山林の荒廃がさらに進行することが懸念されます。

今回の事業対象地域(長野県下伊那郡高森町)は、総面積182.93ha、所有者数は194名で、平均所有面積は1haに満たない小規模所有者が集中する地域です。アカマツ林が48%を占めています。近年マツクイムシにより壊滅的な被害を受けており、民家に近い里山でありながら管理もままならず、全体的に荒廃した状態にありました。

飯伊地域は、長野県の最南部、中央アルプスと南アルプスに挟まれて位置し、地域の総面積の86%が山林です。地域の森林所有者約2万人のうち、8割以上が所有面積5ヘクタール(ha)以下の小規模森林所有者です。

飯

伊地域は、長野県の最南部、中央アルプスと南アルプスに挟まれて

小規模森林所有者が多く、  
荒廃が進む「里山」



森林整理が行われた里山の林

下の組合員については管理料を無料とするなどの利用促進策をとった結果、146件受託したものの、受託した森林は平均6.3haと比較的規模のある森林所有者からの受託に留まっています。所有林を放置したり、組合を脱退する事例が多い小規模森林所有者の「森林管理に対する意識改革」を何とか図りたい——こうした組合の思いを背景に今回の助成事業は行われました。

### 地域の未来へつながる森林再生

#### 組

合では、事業対象森林の所有者194名に対し、荒廃した里山の状況の改善と継続的管理を目的とする「里山の森林再生事業」の地区別説明会を6

回開催し、加えてはがき・電話等による周知も行いました。所有者からは、「薪山として所有林を活用したい」「価値ある山にしたい」「土砂崩れのない山にしたい」といった積極的意見も聞かれるようになり、最終的には約8割にあたる154名と「森林管理委託契約」を締結することができました。

委託された森林については、境界確認等の現地調査により情報をデータベース化し、アカマツの広葉樹・ヒノキへの転換、ヒノキ林の大径木生産を目指した長伐期施業の取組みや作業道の開設整備など今後の適切な管理計画を立案のうえ、特にマツクイムシの被害がひどいアカマツ林32カ所については、伐木・搬出するなど、個人ではできなかった森林管理に地域全体で取り組みました。

長年放置されたアカマツ林を整備したことで、効率的に木材を収穫し広葉樹林へ転換する技術など将来への新たなテーマも見えてきました。そして、何よりも多くの小規模森林所有者と契約を締結でき、里山再生の意義について地域住民が理解を示してくれたことで、森林整備を継続的に進めていく道筋ができたことが今回の事業の大きな成果です。

「里山」の森林再生は今、始まったばかりです。

### 「立場の異なる多くの人と手を携えて」

飯伊森林組合 総務部指導企画係 遠藤 寛子様

「FRONT80」の助成をきっかけに、広葉樹林に転換されたアカマツ林では、地元企業の出資で社員と小学生による植樹イベントが開かれました。植樹された森林は所有者、森林組合、地元企業の三者が協力して継続管理していきます。立場が異なる多くの人々が主体的にかかわることで、より持続的な里山の森林管理を目指していきたいと思います。



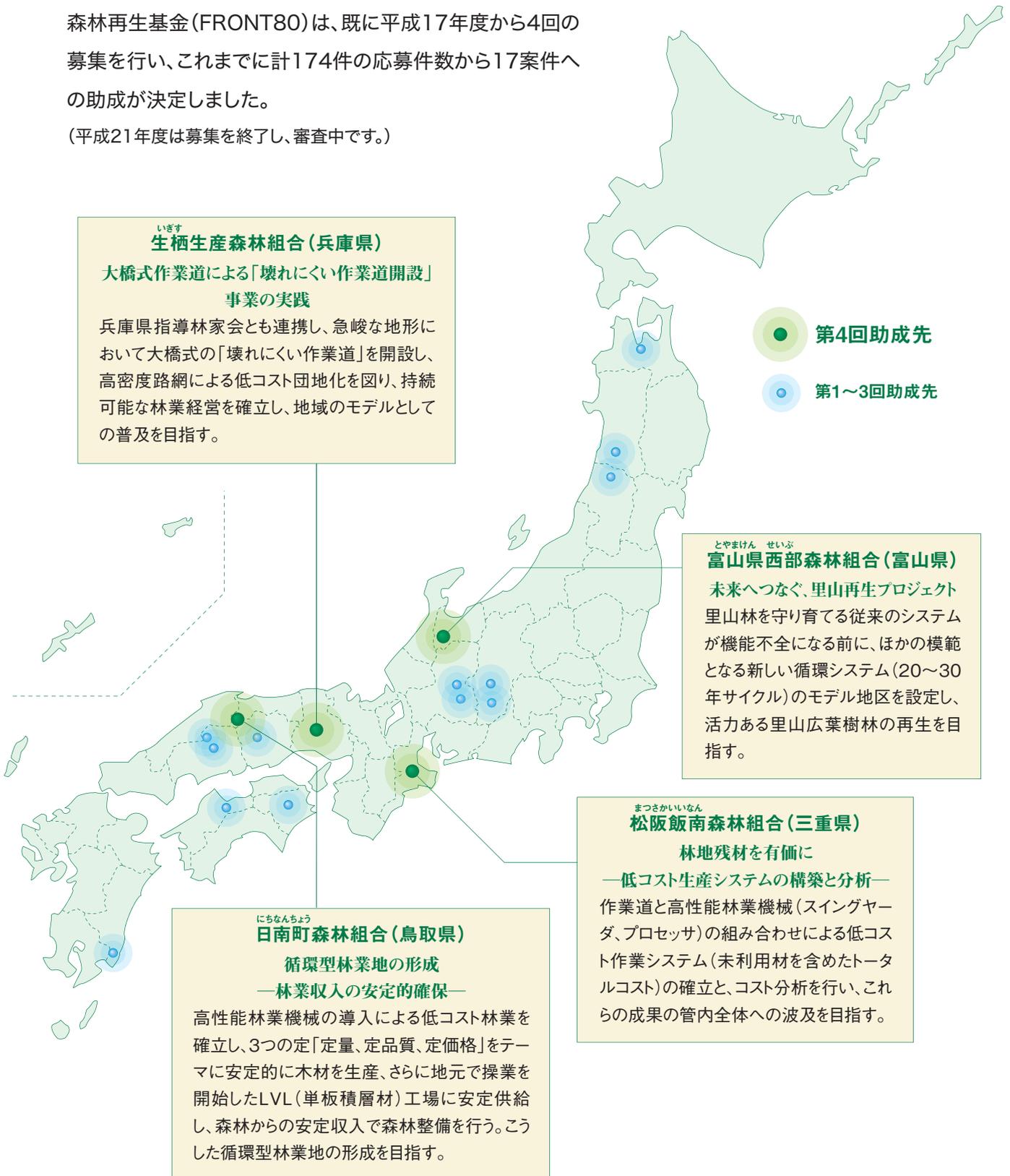
地元小学生と行った植樹イベント



## これまで4年間の取組み

森林再生基金(FRONT80)は、既に平成17年度から4回の募集を行い、これまでに計174件の応募件数から17案件への助成が決定しました。

(平成21年度は募集を終了し、審査中です。)



## 第3回助成では初めてNPO法人へ助成 NPO法人山里の暮らしと豊かな森を守る会

事務局理事 伊藤 伸二様

長野県中川村四徳地区はかつて「炭焼きの里」と呼ばれ、薪炭林が維持・管理されてきました。しかし昭和36年の土砂流出災害による集団離村で、現在は不在村者所有林が多くを占めています。第3回助成対象となった「わがふる里のもり再生整備事業」は、当初の計画では森林景観調査・植生調査等が主体でしたが、実際には森林整備に重点を置くこととなりました。事業に対する理解と山への関心を高めるには「厚い調査報告書“より”キレイになった森林”を見てもらう方が効果的だからです。所有者だけでなく、今回の事業を評価いただいた中川村が平成21年度に間伐事業費を予算に組み入れるなど、行政との協働関係を築けたことも、今後の事業継続につながると思います。



第3回事業発表会でのプレゼンテーションの様子



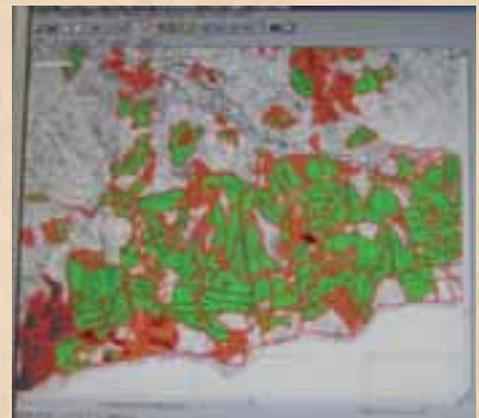
伐採木のマーキング作業

## 未来に価値ある森林資源を残す

### 森林組合系統の「施業共同化プロジェクト」をサポート

当金庫は、森林組合系統が平成18年度から実践する「施業共同化プロジェクト」への支援を開始しました。近年、森林所有者の高齢化や所有者の世代交代等で、森林の境界線の明確化、森林の現況把握が喫緊の課題となっています。同プロジェクトでは組合員の森林情報を詳細に把握してデータベース化することを第1ステップに、山林の集約化（大規模化）や機械化による間伐コストの低減など林業経営の改善、適正な間伐等による木材の安定供給を目指しています。当金庫は、間伐等の適正な森林整備活動の推進は、地球温暖化防止にも大きく寄与することから、平成21年度に森林組合、都道府県森林組合連合会が森林情報を管理するGIS（地理情報システム）、境界測量用の機器であるGPS（グローバル・ポジショニング・システム）、デジタルコンパスを購入またはリースする費用の一部を助成いたします。

（本年9月には助成を開始しました。）



GISによる森林情報の検索画面



GPSによる境界測量